

矛盾の中の警察官

——警察活動への理論的アプローチ——

ミシガン大学 清水麻友美

【1. 目的】

本研究発表は、民主主義における警察活動を理解するための理論を提示することを目的とする。

警察をいかに統制するかは、全ての民主主義にとっての挑戦である。警察活動は権力行使を必然的に伴い、時に人命を奪うほど強力に市民の普遍的権利と自由を抑圧する。多くの既存研究は、警察が国家機関としてこのような強制力を行使する面に着目し、警察とは国家権力がそれ自身の利益を、実力をもって実現するための道具であるとみてきた。この視点によれば、警察活動は恣意的な国家権力の発現であり、国家にとって不都合な集団を社会の底辺に押しやり、排除する活動として捉えられる。

しかしこれら既存研究は、警察を市民社会と敵対する機関とみなし、警察が市民社会に貢献する側面も持ち合わせることに十分な注意を払っていない。すなわち民主主義において警察は、市民の権利と自由を脅かす存在から社会を防衛する任務を負っている。しかし警察は、この市民社会の防衛という目的を達成するために、市民の自由と人権に対する抑圧を不可避的に伴う活動を行う。ここに、警察という制度が直面せざるを得ない構造的な矛盾がある。民主主義における警察活動を理解するためには、この手段と目的の間の矛盾が、いかに現実の警察活動を方向付けるのかを検討する作業が不可欠である。

【2. 方法】

理論化にあたり、アレクサンダー (Jeffrey C. Alexander) による市民圏理論 (Civil Sphere Theory) を警察活動に応用発展させる。第一に、市民社会を防衛するという警察の任務と現場の警察活動を理論的に結びつける。アレクサンダーの理論を引用し、警察の任務は市民社会の中核的理念たる普遍性の実現であると主張する。第二に、この普遍性の実現が、いかに警察活動に伴う権力行使によって制限されるかを考察する。最後に、提示した理論を実例に適用する。

【3. 結果】

普遍性の実現という目的に向け、警察はその達成手段として二つの方法を取りうる。これらは目的の達成手段である反面、いずれも権力行使によってハイアラーキーを生み出すため、それ自体として目的と矛盾する。第一の手段は、「何が正しいか」を具体的に定義し、その価値によって社会を秩序付けようとする予防活動である。第二は逆に、「何が間違っているか」を定義し、それに該当する具体的な対象を排除する法執行である。

警察官は、予防活動においても法執行においても、警察としての自らを「正しい」側に位置付けようとする。つまり、予防活動において警察官は、市民を彼らより道徳的に劣る存在とみなし、活動を通じて市民の行いを正そうとすることで自らの正しさを主張する。また法執行においては、正しさを破壊する存在たる犯罪者から社会を守ることで自らの正しさを示そうとする。このように警察は、普遍性の実現という任務を遂行する一方で、自らを市民社会との関係で優位の存在と位置付けることで普遍性を害するという矛盾を、現実社会で構築してしまう。

【4. 結論】

民主主義における警察は、単なる権力者の道具ではなく、権力からある程度の自律性を持ち、権力と市民社会の理念の実現という任務の間で矛盾を抱える存在である。警察活動は、権力の発現としてのみではなく、権力と理念の間の構造的矛盾に直面した警察官による、自律的な行為選択の結果として理解されるべきである。